重修真書太閤記

九編 七

晴

家傳

第十

和書門	
類	
號	三四〇五三
函	二一六
架	一三
冊	四〇

內閣文庫	
和書	
類	
號	三四〇五三
冊	四〇
函	一七一
架	一二

新刊紹本

內閣文庫		
番號	和	34053
冊數		40（17）
函號	171	45

国立公文書館
National Archives of Japan

重修眞書太閤記九編卷之十九

中川勘右衛門尉高之我意と振ふ事
并梶川平左衛門尉正継中川と殺し事

中川勘左衛門尉高之い北畠殿の番頭ゟ禄も五千石餘と領し尾州丹羽郡犬山の城代なりしゟ今度秀吉の味方江州侍の隨一浦生忠三郎氏郷い定めて千草越ゟ勢州へ亂入とるゟんゟれと防くゟい嶺の城ゟそよゟうゟめとて佐久間駿河守正勝と大将とし中川勘右衛門關甚五兵衛と加勢として差遣らしゟる天正十二年三月九日の曙ゟ

蒲生忠三郎氏郷生年廿九歳江州武者の大将とし
て長谷川藤五郎日根野備中守とこの人瀧川與力の
侍と引率し嶺の城と攻けるよりう佐久間中川關
城外へ切て出川を隔て拒き戰ひしら共城方打よ
けしうい佐久間駿河守正勝腹切んといひけるを
山口長次郎重政うく諫めて敵と追拂ひ城へ入
けるよ關甚五兵衛い返し合きて戰ひたう寄手
城門と攻るとと急あり正勝重政手をの〳〵
拒くよりう寄手引退さをとも援兵もあひまい
正勝遂よ城と開く中川も城と出て犬山へ帰らん
とせし處と梶川平左衛尉名乗りけるを切殺

と其故いうよと云よ梶川平左衛門尉正継の父と
楠彦右衛門正治と云美濃國池尻へ注しきうい池
尻彦右衛門と名乗織田殿へ仕ひるう梶川平九郎
信時の壻とありて又梶川彦右衛門と云長男市郎
右衛門正信い織田備後守殿へ仕次男ハ郎梶川平
左衛門正継ふう北畠信雄公へ仕らしめい尾州犬
山の城と預りけるう中川勘右衛門犬山の城代た
らんとと庶幾平左衛門正継を様々よ讒言して犬
山の城の預りと止め足軽の頭として長嶋へ住を
けう平左衛門禄五百貫ふりとも至て貧窮ありさ
とする武器いいふよ及こび足軽の手當とへて同

僚よ越たりしわとよ組下の思ひ付よと別てしろしめりけり然るに梶川よ一人の妹あり容色よそなれと女功いいふまでもなく手うち花結ひ絲竹の道すてあらふらうしうへ清洲長嶋りけて此妹をとりくよいひ沐しけるよりいつしろ中川もひとを聞付媒をたのみ平左衛門尉よいひ入たり其頃中川い禄三千貫よ及ふ大禄ありつつい家老職ありり妹のことめよ仕合との縁とおのひいまとも平左衛門尉身上あしく妹の身の廻りよ下手道具すて勿々急よ取賄ひうとしとて是と肯ひ然るよ中川い見ぬ戀よあとうるとまさうよ車の

首尾を整えんとさまくいとをとうとも宿角平左衛門尉ひとをゆるさるへ媒もをんうさるへく終よ中川よ是を断りけるよ中川大よ腹をさて我さまさまよ取あしきをいあそ殿の御前もろしきあるを然るを定めて犬山の城代と某ら申をよろうて改めらまとしあくんと夫を遺恨よ思ふあくめよしこのそれあくへ又此方よも報答をとくを道いさまさまあうといひたりけり果して例月朔日の禮とて諸士出仕しける時平左衛門尉もいつのの如く登城しけるを信雄の御前よ召よ其方事い北畠家おて新参あるとも織田家譜代ののなるを故

上鉄炮とあつかひ物頭より番一置つるゝ身上あ
ひ由ゝとい平日過分の奢をさゝき故あり五百貫の
禄すて妻子と養ひ〳〵も福有のものも有とう
然るゝ平左衛門尉い無妻あり左様ある心掛あ
き侍北畠家ゝ入用あひとも實家の由緒もあと
い扶持〳〵置あり依て鉄炮と返〳〵定輕とも取
上るなりとい〳〵渡されけるゝ平左衛門尉へ
面目と失ひ退出をんとあ〳〵ける處へ中川出来り
今日の御首尾あ〳〵さ氣の毒ゝ存とるなりまう
あゝ〳〵信雄公の御氣質知あ〳〵なり定めて又
思ひ返さるゝことも早うるへ〳〵氣りよう〳〵けあ〳〵

あゝと取あ〳〵その後鉄炮い明早朝返納あるへ〳〵足
輕い其時直ゝ引とさるへ〳〵と申達〳〵けり勢州
すて五百貫とい〳〵いその頃凡黄金十五枚の直あ
り十五枚すてい大低米五百廿五石許と買へ〳〵五
百廿五石い四斗入とし〳〵千三百表餘ゝあるる其
翌日目付役多門官左衛門武具奉行波岡權太夫梶
川の家ゝ至り鉄炮と請取是と改め見るゝ筒の掃
除も行とゝゝき磨さも念入玉薬その外胴亂玉とさ
ゝ火縄とゝ〳〵麁畧ゝなを〳〵處あ〳〵又足輕とも い引
とうゝ〳〵ゝ臨ゝ涙とあゝ〳〵今まゝ〳〵ゝる頭役を
知さるゝとの情深さとゝ感〳〵名殘とあ〳〵けり

るとあり是い梶川我藏入の五百貫と引分百貫へ組足軽の手當百貫い鉄炮の修復料二百貫へ我家来の料となし殘る百貫と以て我家事と賄ひし故ゑ家事い五百貫の侍ゑ比して殊ゑ貧しく見えしなり目付衆ゑの事と聞て肝と消さてい奉公ゑ勉めて家事ゑ乏しうする道理あり得うこと侍ゑとあうけるものと知あるべき大将ゑそ頼母しゑ思ふいゑのもあり理や南朝第一の忠臣楠り末葉ゑといなりとゐむるのもあり梶川い犬山の城代と取上らるしも信雄の心より出しとゑ又今日物頭と止めらるしも信雄の心あるべし眼のゑ

ゑ大将の處置をんうゑもなしとおもひける處ゑ人有て告げるい御邉の妹と中川り妻ゑをんと中をし由それと御邉りいかゝ故ゑ中川ゑりめゝる始末ゑ及ひしうさそ内府公の仰として平左衛門尉り妹と奥へめし出されそのゝち御意すそ中川り妻ゑ被下べしとなそ申上しゑ内府公い中川り申まゝり御承知あそらるとなり御邉何とりなすしるゑと申けるゑりゑ平左衛門尉大ゑめりり悪ゑ中川めり挙動やその義ゑり犬山の城代とも中川めり奪ひしゑらめ武士道ゑらつすし中川め人兆人とい彼ゑるべし欲と知

て義とらび色と重んして禮をつくさずへぬ畜生武士といふく我妹の夫とせんと牙をとぎ躍り上り腹立けるゝ暗愚あれ共大将ハ父祖ゝ主人たる織田との子ゝ恨むゝとよあらぬ只ゝさい中川勘右衛門ゝ是も亦意趣と晴と時もあるゝ〜と更ゝ心ゝもつけと弥我身の武邉とゝゝと居たりけゝ思い物頭と退られゝも従者ゝ車ゝゝ平左衛門ハ負之ゝとの侍一通りいとこゝも貧ゝゝ真の武士とハ彼ゝゝめと家中の評判ゝゝ中川又姫ゝとゝのひゝゝいろゝと讒言けるゝゝ終ゝ梶川平左衛門尉ゝ

五百貫と没収ゝ長嶋と追出されたりそれゝも梶川ゝとこゝもいとまゝ武具の長棹いくさわとなゝめさゝけ白昼ゝ長嶋と引退さけり中川おのゝゝまゝゝ梶川と苦めて意恨いとれゝゝとゝもゝゝとおのひゝ女とい取逃ゝゝとも快ゝゝ無念の月日と過けゝる内ゝめゝる世間となゝ中川ゝ嶺の城ゝゝると聞て梶川平左衛門尉上方勢ゝ加ゝゝ嶺の寄手ゝゝ居たりけゝる中川嶺と出て犬山へ落行ゝゝと聞出ゝ梶川平左衛門尉此時なりとおのひけとい池尻の藪ゝゝとて待人あゝと神ゝゝぬ身のいゝゝゝ知へゝ中川勘左衛門

馬とゝめて馳過けるを追つめてそれあるハ中川勘左衛門う珍しゆ梶川あるをと名乗やいかゆ鑓引をゝめて突うゝる如法深夜の事といひ思もゝゝぬことすゝと肩さゝさふゝゝ突とたる最初の手疵いさけきハ太刀ハ抜てもゝ腕ゝのそうおのゝ様ゝハ働ゝをゝぞ上段下段下々と戦ふをとゝ中川次郎ゝ請身とありけるを付入て勘左衛門う左の脇腹ゝさゝと突ぬきたりされとも強氣の勘左衛門太刀振あけて梶川う鎗塩首切折ハ梶川そうさゝび二尺八寸大兼光の刀と抜て中川う肩先より乳の下まて切下たり深手ゝれハ何うハのつてたまるへきそのまゝそのゝ倒るゝと起しもたゝてあさへく首とうさ落し我陣中へうゝとなり

池田勝入齋父子犬山と攻る事

犬山没落清藏主戰死の事

梶川平左衛門尉ハあのふゝゝゝゝ本意とゝけ中川う首と取て寄手の陣ゝ走う帰をハ寄手の隊将此事と聞直ゝ宰相秀吉卿ゝめくゝと言上をしゝハ其手柄とあつくゝ賞とゝゝゝゝ中川勘左衛門ハ信雄の方ゝて一万二千八百八十貫文と領したゝハ梶川の身上ゝう三十倍ゝもゝゝぶのゝゝそれとなゝゝゝ討取しハ我此度の軍ゝ勝へき瑞ゝと

深く喜ひあひけり又大垣すてい此事を聞犬山ハ主将おーいさや一計策して是をとらんとの日置三蔵を犬山へ遣らしけり是ハ勝入齋元亀の初信長公へ拜領ー一万貫を知行しけるを普請念入て塀築垣よりよ手固くあらくへけるよ天正九年織田源三郎殿を堺として犬山へ納奉りけるよ同十年六月二日源三郎殿京都にて戰死ありけるよ尾州一圓信雄の領となりしよりよ犬山よ梶川を置よ直よ取放して中河を城代となすーあひーなりされハ中川も犬山の町人よ親しくあけるをハむりーーのうの池田を慕らしおのくも理あり三藏犬

山よいろ〳〵本來當城ハ勝入齋の築あひし所ありこの度當城を乘取んとおのくよりてい戈覺頼入申たるとハ町人共同心し明後十三日の夜舟を渡し御人數引入申へくゆ必その期を御違あるよーーひたーーーこの方よたーうある證據あくハ御疑心もあるくくひとて人質三人ちーけるとハ三月十一日の未明よ日置大垣へ引うへし此由を申けるとい勝入齋おとう上うてあれを喜ひをやうよ陣ふるまおして腰兵粮一日分の用意して十三日大垣を立北方のちーうより小舟を多く荷ひ東をさーして馳行すめとの渡しうの亥の時をおやーを頃紀

伊守十艘の船すて岐阻川を渡り城中へ忍ひ入を
あくち関の聲を上たりけり城中もそへおのひも
ふ〳〵ね車ていおり中川ハ討ぶ〳〵折ふり上を下へ
と仰天一防く〳〵へさ氣力もなく妻子を隠さんとあ
〳〵てうろ〳〵へ廻るものを斬てとて立むかふものの
へ組ふきて首と取けるを見て勘左衛門尉う叔父
ふ清藏主といふものの有けるう諸士をいさめてゆ
の〳〵具さを勘左衛門尉うさとてうとハ聞ともい
まゝ目と目と見合をしてとゝもあらゝび敵のてうう
て説とうも知へ〳〵うつ遠州濱松うり加勢を
出さる〳〵由いたしうあり志〳〵ふ〳〵へる其内

ふハ開運をへさなる我と手本ふをゝと呼てう
呼ふう切てい棄拂ひてい切ふとしけるを見て城
中の兵士大ふ力と得いさとたつと呼あつめ持場
持場と固めさせ清藏主ふう廻りて下知しつふ
とも在地の地下人とも池田と慕ひてその勢を引
入し處なりとなハ紀伊守之助血氣さうんの若武
者ふう相從ふ侍とともうハ渡邊敢負河合又左衛門
片桐半左衛門尉いつまも聞えし老功の名人ふを
べ攻口を明て手ぢけく攻しうい城兵大うと落うを
てふきく兵もふし清藏主只一人心とくとう氣を
くしけまして働けとうも崩とうゝ勢ふを一へ更ふ

のりうとへさ体もあるしとうくなる内よ勝入齋も
こを来り荒尾四郎右衛門以下鬼神とも欺くべう
うの侍いつもくも年来の旧地あり故郷よりへう
し心地しく案内く知たりこしのしこり攻入て
をさ間あひとい清蔵主も力屈し氣摧亂軍のうち
よ討死を行年ハ五十八歳その家よ生とたれとも
一且出家したまとへあつくくとも人の笑と得へさ
よあくべ然るよ姪の勘右衛門犬山と出て崩の城
へ加勢よ行ける時よ打まうとて頼むといひたの
めといひつる言の葉を恥てうくありぬることを敵
も味方も一同よあふあとれといとぬ人ふをあう

うひを大将戦死をし上へ残る兵あるひハ討とあ
るひハ落行おのうさよくあり行ハ城ハ終よ落よ
けり清蔵主うさとる鎧の引合よ挟うたとへ紙
身ハすくへ行へとのいうあとい此ひくとあ紙宮ようけん
と書てありけるとを見る人ひとさそうあしめり勝入
齋父子ハ手くくめの軍よ勝なとへハの始くくと
喜ひけるう十四日の早天よハ城下の年寄肝煎ふ
といふのをと先よ立て町人百姓とも旧主の入部
と賀し酒肴とのとさとを目出たりうけるよこのう勝
入齋もこるくよ引出のあとくへ酒のまをあとし
て町の役とゆるくうへこふ万歳と唱へて喜ひ

あへて其後森武蔵守長一遠藤但馬守の許へ犬山手
よ入し由を告知をきそらく軍勢を休めける處へ
森武蔵守遠藤但馬守らも来り今よ始めとある
ら池田家の武勇たのもしき事といひ様々祝詞を
いひつゝけ此勢よのり此近邊を放火し敵よ肝を
つゝさをとゝと勇ミ立けるゝ勝入齋元より思慮
深ゝぬ人なれとも興あるゝとあめり然あるゝ今日
一日ハ休息をへし明日ハ近隣を焼てさらさとへ
し定め其日ハ一日酒宴して士卒とたのしま
め十五日夕の刻よ池田父子小牧山近邊すと勢と
いそゝ在々所々一宇ものこさず放火し心地よ

とて関と發そのまゝ犬山へ引返しけるとなり
森武蔵守ハ濃州可兒郡金山の城よ住ミ犬山の
北五六里あり遠藤但馬守ハ濃州郡上郡八幡の
城主なり
濱松勢ハ十四日よ御先手松平主殿助家忠大須賀
五郎左衛門尉康高以下伊勢國来名をさして發向
ありける處犬山落城の告あるよりの一部川より
引返しあひけるゝ御旨よりの酒井左衛門尉忠次
松平主殿助家忠両人ハ来名よりの其邊と巡見
し十五日酒井忠次松平家忠引返し清洲よ至り
頃池田勝入父子の兵士小牧山近邊と放火しける

とて煙とゝく空よりひさけるを御覽し池田勝入
齋は尋常の侍よあらじ等閑よそるゝへきよあ
らはとて御勢と小牧よおしむけあへは勝入齋も
是を聞早々よ兵馬を納めしとなり濱松勢は清洲
より三里おし出し落合といふ處よ陣しあふ
甫庵本よは十四日の夜清洲よて軍評定あり小
牧山と城よおしらへ秀吉の出陣を待て對陣を
へしとなり十五日午刻清洲と發途ありて小牧
山へと急さあふ處よりの邊よあるゝ炬天とく
のゝしの聞の聲天地と響ゝ聞えけるよあり扨
は勝入齋燒働さよあるゝめ急けあゝと鞭

とゝめけるよ勝入齋人数を方々へ分遣し
一時よ仕舞て早々よ引入しとなり清洲よりの
御勢は二万余騎小牧山よ到著あり近邊の長百
姓を呼出し池田ゝ容子を尋ふよ已刻ゝりう
よ二三万ゝりの勢ゝそおし來り手分して在
在所々を燒ゆゝ一時よ引上しと答しゝは足
摺して悔しあへともひなしとあり
おれは小牧山を敵よとゝ止さる樣よとおゝめ
しとなり犬山は池田よとゝ止さり此を足たゝり
として三州へ切入へしとおのよふらん但犬山は
ちと遠し小牧山は究竟の要害ゝりあれを秀吉よ

とゝまりて六ケしうるべし秀吉の勢十餘萬とゝもいへ敵地よりの長陣をんすれハ要害の地ととおのゝ〳〵ゝ此邊ゝ小牧山ゝとの處ゝ
へうゝゝ然ハいうゝもゝ小牧山よりゝゝ備を立べきなりと仰られ諸將いつれもハの義
ゝ同一ける由を池田ゝ忍ののの聞ゝ夜のうち
ゝその支度をなゝて是を妨けんと用意をゝとゝ
う

重修眞書太閤記九編卷之十九終

重修眞書太閤記九編卷之二拾

池田勝入齋小牧山の邊を燒事
并森遠藤羽黒表へ出張の事

池田勝入齋今年ハ四十九歳ゝゝて秀吉郷と同年
ゝりゝるゝ秀吉郷ハ今年の軍ゝ克て率土の大
名小名を心服をゝゝめ武將の鎡基ゝゝゝ定ゝりた
りゝゝ勝入齋へ今年戰死をその運の勝劣日を同
ゝゝゝへるゝゝあゝゝゝ但秀吉郷ハ本卦噬嗑の九
四ゝるゝ今年三月漸の初六ゝ當る即火地晉の卦
とゝる晉ハ昇進の義ゝり勝入齋ハ本卦賁の上九

あり依て今年四月皎妹の上六を得て火澤睽とか
る睽い睽乖と云て万事をひさそりく心とし又睽
違といふ猛将勇士といへとも天道の循環のうる
はしと得と奇るうか爰よ勝入齋の嫡子紀伊守
之助と共よ家臣渡邊河合日置岸桐荒尾等と率ひ
て尾州犬山の城と乗取それより森武藏守遠藤但
馬守等の勧よりて近邊と放火して武威を示さと
やとて天正十一年三月廿五日早天よ犬山と發し
小牧山西北よりの兵士と多ちて四方の在家と放火
しけるう元よりの老功の勝入齋のとい諸方よ遠見
斥候と出し置敵の變動探り諸手よ下知を傳ふる

進退の作法ふのつ孫ふ〳〵天晴累代弓箭の家の
故實と知たり去程よ放火の煙四方よ満々迦樓
羅炎天と焦して燒立しうい其邊の百姓地下人大
よ驚き親と負子と抱へ資財と棄ておのう様々逃
散たり此日濱松の御勢北畠殿と共よ尾遠三の兵
士三万餘騎と率し清洲と進發ありて小牧山の艮
の山よ要害と構ふ是い秀吉の十三万餘騎を喰
止らるへしとの計あり然るよ放火の煙西南よか
ひさけまへ小牧山の上い眞黑よなりて其際よ炎
燃上るさま実よさまく見えその方よ當りて
鯨波の聲くけ〳〵聞えけるよりう遠三二州逸雄

の若殿原をゝや池田勝入齋犬山より打出たると覺ゆるぞ早馳合をとて駈ちゝをや透間あゝとあると馬より鞭をうちて走けるに誰うい少も猶豫へゝ我劣らじと押出し濱松の御旗い信雄公より五六町も進んで押出しあゝへい池田う所候ふれと見て速みられと勝入齋より告たりけり勝入齋ふれと聞て尤おのゝ事ゝ長嶋のぬゝ若殿ゝうい此煙とゝゝゝゝ支度とやゝ給らんとゝん遠州の侍衆何とてふれと余所より見ん急度打出るゝるへゝたゝし今日いたゝ景氣と見んとの働をなり爰へ取うけるとてい危ふうるへゝ早々人数とやとめて引退くゝと揚螺を吹立ゝうい走散たる池田う兵士忽一所より集りとのゝ一同より申けるへ遠三尾州の勢三万餘騎小牧山より良より當りて陣を張ゝより見え申い早々駈向ひいさその備のきゝぬうちより打散ゝ可申いと注進けると勝入齋聞て莞尓と打とゝゝ尤もあるゝゝ尤もあゝん早々犬山へ打入へゝと下知とれい紀伊守之助大音聲より何とて尤様ふ臆しあゝよそ我々う勇氣へうゝふてもの知召つゝん其備らさるを打とい兵家の庭訓あゝといさたたてい勝入齋大よふれと制し其方共尤様よゝゝると尤以危ふゝ佐久間玄蕃う破とゝと

とおのくこれも勝家ゝ止め一時ゝ止まりたゝいあ
まとのろ〳〵貝いを〳〵敵の備の定まるゝさるゝと打
とりへとも今遠州勢の軍立と聞ゝ少もとゝたる
處なゝまはら駈とる若武者い味方と誘引とうり
とゝよそれゝ乗わとうひあゝ勝入あゝ〳〵今日の軍
い此翁ゝまうもせようゝと云つゝ馬の頭と立直ゝ
犬山さゝて引返と遠三の若殿原走付て見ゝとを
い遠松の上ゝ旗ふゝるひさ池田ゝ陣をゝ其處ゝ
い燒棄たる箭と竈の跡のこりゝて人氣あひまい
あされたゝ其由本陣へ注進とれい濱松ゝもさ
といゝと並々ののあゝと仰らまたんなと

其方共の手ゝ逢わゝとの勝入あゝ〳〵とうち笑とを
あひゝなり若殿原カなゝおのひつまい此競ゝ犬
山へおゝ寄たゝ一のこゝ採落さんとひゝめゝと
先手の大将松平主殿助家忠酒井左衛門尉忠次大
須賀五郎左衛門尉康高追々とを付さとも〳〵池田
勝入ゝと程軍畧ゝたひつゝんといおのひもゝ
ひ能圖ゝ引上ゝのうゝ今とゝ遅うをい我
々喰付て犬山ゝとゝも付慕ふゝさゝ残念なることを
をゝの武實ゝ織田殿の軍ゝと能とまゝる
るのあふと大息繼て感ゝいゝ面々と
わと届さたる老功の侍ゝ向ひ軍をんと容易をも

らゝ各々の心はそ何とあるべきさぞ御下知を待て手柄をあらへと諫めけれは何とも拳を握り牙をむきゝ〳〵あるて五六町隔てゝ森のあるゝよ鉄炮の音〳〵ひゝるゝゝうとゝゝ引残りゝる池田勢あるそゝ我々よ向ふと覺えゝうゝゝ掛りて踏ほゝを〻と勇こたゝへ松原遠く池田勢五百騎旗五六十流あゝたゝゝ静ゝうよ引てゆゝ有様と見るゝう三列勢是とゝ是非よ追止んとなゝけるゝと酒井左衛門尉忠次大きよ制〳〵けるゝ三列勢あるゝゝと小勢よてゝ引のゝを追ぬゝといふ法やある我々ゝ得のゝあゝ見物〳〵てあゝをゝゝといひけるゝと聞て左衛門

尉いや左よあゝゝ今何時と思ひあゝをあの勢を追て犬山よ至らんあゝろゝ早夜よ入へゝ夜軍ハ難義のゝなる上殊よ不知案内の處なゝう軍ハ今日よ限らゝといふゝれて落合郷の御陣を取巻陣とゝる爰よ森武藏守長一遠藤但馬守繼基ハ放火の事と勧めあゝゝ其事ゝゝうよゝゝと無念よおゝひ其勢一万餘ゝて羽黒の八幡林へ出張を羽黒といふへ犬山と小牧の間あゝ然も池田父子と牒し合をもせゝ此由遠州の御陣へ聞えけるとハ酒井左衛門尉忠次ゝゝと討て上方勢と手合よ一塩付らゝと言上ゝけるゝ實よ然るべゝとて御免ありしゝ

い松平主殿助大須賀五郎左衛門のゐ共よ十七日の早天ゐうハ幡林をさして發向と其勢らつゐよ七千餘騎森遠藤ゐ一万餘騎と追崩さんと掛ける と上方勢の其中ゐう仁科權太左衛門と名乗外花おとしの鎧着月毛の馬よ打のゐ浅黄の羽織着たる待歩士十四五人と引具し走廻りけるを見て奥平九八郎信昌あとにれ敵や鉄炮よて打落さんハ安けとおもゐいて一鎗とゐけ向ひ川中よて鎗と合をけるゐ何とゐ一たゐけん仁科奥平の鎗と請損し忽ち川中へ突落さる仁科起直らんとする處と奥平ゐ郎等夏目外記落合て首と取む

とと見て森ゐ手のの奥平と追取巻とれ打取んと進ゐ〻ゐハ松平主殿助酒井左衛門尉とゐとおめいて走ゐる森ゐ手の者防さゐ色めき立て見えつるとハ武藏守自身馬と乗出し眞先よ立三刀勢森とハ見知たり是と聞ふる鬼武藏守千騎ゐ一騎よ向ふ首ゐ脱とゐ〻と穂先とそろへ突ゐうる森ハ血氣の若大将ゐう士卒とゐさめて此を死場とおのへゆと火水よなりてゐをさけゐ遠三の兵士と東美濃の侍とハ互よ見知り中ゐとハ汗と血よなりて戰ふゐとよゐつらつへ〻共見えさゐけゐ爰よ遠藤但馬守ハそこ〻川下よ備と立て

森ヶ戦ふを見物して居たりける處へ大須賀五郎
左衛門尉康高ゑを掛りそれより御渡りけれハ遠藤殿
ヶ是ハ大須賀五郎左衛門尉おかしく千葉の平氏
あり見參申と名乘りけ鉄炮二三發打やりかな抜つ
として川をさし切てかゝる此時奥平ヶ後陣の兵
士おかしく川を渡して切かゝれハ上方勢こらえ
ぬ係引色よありけれハ大須賀五郎左衛門尉丹羽
勘助ふとのめハ兵とも軍ハめしかそとそ敵よ
向てハ組て勝負をなるのゝふと勇めりいさめら
れ潮の涌ヶ如くよ寄けるよかりかけてハ森の手
ハ遠三の兵士のめくりて川を渡て處をとりけり

て半途を討んと支度をしたと大須賀丹羽の兵士よ
先をかけられし遠藤ヶ計略いさつらとあかりつれ
ハ遠藤も火花を散し鬨の聲を合せ追つまくりつ
東西南北へ月よ星の大旗小旗入みたれ打あひ
ヶきぃ死生をうとて切合たり武藏守ハ味方の敗
るゝと見てさこふりのの共と大音よよそてりか
け鎗を打ふりく遠三の兵士の競ひかゝると突ふ
せ突ふせ進こけれハ十三四人ハ手の下よ討とら
了武藏守此勢を抜そふと呼ゝりく突立ハ奥平
ヶ勢心ハ健けれともおのそれ一二町くりうちさ
かけり大須賀遠藤の戦ひハ互よ知つ知とし中と

いハ名と惜む勇士ゑとハ入みされ入うとう更ゑ
勝負も見えい

酒井左衛門尉奥平九八郎森遠藤を破る事
并野宮助左衛門尉父子戰死の事

森武藏守の先手をてゑ引色ゑ見えしうハ武藏守
自身鎗を取て三遠の勢と二三町追くゝ猶も奥
平と目ようひ走めゝりて下知とる處へ松平主殿
助宛竟の兵士六百余騎と引つと上の瀬とゝゝ
森ゝ横合へ突ゝる森ゝ兵士前まハ奥平ゝ軍ゑ
けゝく透間おく汗と流して戰ひ左急ゑると横合
ゝう又突立らゑ狼狽ゑさうゑけとも武藏守ゝ

ゑて鬼とゑそれし侍ゑれハ事ともをハ切てハ突
つゝてハ切右往左往ようけ立けゝゑゑゑゑゑ主殿助
の勢ゑゝと詮度と立ゝゝく火花とちゝして戰ふ
たり奥平九八郎信昌今年三十歳氣のさうんゑ
て武勇ハ世ゑ許さゝ侍ゑゑ主殿助の荒手と見て
大ゑ勇ゑたちをゑゑ敵ハ色めくゝゑ我ゑ續け侍と
のと聲と揚鎗と取て突ゝうゝうゝハ森ゝ侍手の
下ゑ五六人突伏らゑさうめゝる處へ遠藤横合ゑ
う切めゝるへく約束したりゝ但馬守ハ大須賀ゑ
のゝ立らゑとて今戰の急ゑるゑうゑ森を援けを横
鎗おのハもゝゝハ森ハ奥平と主殿助とゑ向ひ千

騎ゝ一騎よりゝいたゝ軍に命をかけさりあり迯て
いくらの月日を經ん進めくと手のものを勇めた
て死へ一時と名を万代に傳るものと迯て先祖
を汚そうや嗚呼死ートたりとはめらとそ子孫の眉
目とあるとへさや我と見習へ侍ともと鞍の上に立
上り鎗を握て突たつるゝとて崩とりくゝ軍勢
も又のり返ー主に續いて戰ふさりされとも奥平
り侍とも主殿助まとくゝれーと恥ーとおのゝ
しらへ親ゝとても子たとけを兄手と負とも弟
めへうゝへ踏あへくゝ進ゝけるゝよりゝ森り手まて
らゝ見えそうけり武藏守歯咬とあーー是まて討死

ー名と後の世に残さんやと馬を立直ー既に遠三
の勢よりけ合をんとをーと橋本平大夫川嶋小文
次纏の七寸に取付あくい大将の死ーあに處に非
と御短慮ハと引立ーうい武藏守心ハあさけよく
やとも手のの悉くゝ迯うをけるとう心あり
び引退さ敗軍をあつめて扣えさう遠藤但馬守と
大須賀五郎左衛門ハ元是一流の平氏あり互に意
趣ハるけとも義よりて敵となり味方となる
迯て先祖と辱しめんとう死ーて孫子のおのとと
起を命ハ輕ー名ハ重ーと鏑とけのり穂先とそろ
ーすもー引ーふとちーめて突合追ゝるくれ

つ戰ふ處へ丹羽勘助大須賀と援ひて眞一文字に馳うゝる丹羽勘助氏次今年三十五歳膂力さうん人氣たひく遠藤と日ようけ餘さいと擧動い大須賀ゝ力と得三尺ゝうの大身の鎗と打ふり打ふり進とける体い仁王と作り損をしゝ如くみえ見えたりけと遠藤但馬守心ゝうい猛けとと丹羽ゝ力ゝ突崩されぬ旗ようゝるゝうけると家の子ゝ岡村彌大夫義上文右衛門ゝ下十三人枕と並へて討とける其間ゝ但馬守い虎口とのうと森と一所ゝ犬山さして落行けり遠三の若侍されと追んと進とけると酒井左衛門尉ゝと見て味

方と制し備と立静々と是と追撃しうい遠藤と森との兵士等定めて遠三の衆備と亂して追撃るふらんその時大返しゝ合をんと計うゝのの共酒井左衛門尉の軍ふうを見てさてい備定ゝり手配ゝ出しゝる處へ返してい何の利うあるさと直逃ゝ逃たりけるゝ野呂助左衛門尉宗長れい我等一人の恥ふうとて只一騎引うゝと宗長その日い黒糸の鎧ゝ赤熊の冑と着黒き粕毛の馬ゝのゝ三尺八寸の太刀と以て十七八人手の下ゝ切て落し心地ゝよけゝ切て廻とい勢たけゝ三州勢も思そゝ跡しさりたりけとい助左衛門大音

より美濃侍いかくしたるまよとよそてりく
操引よ引けるとの三州勢むらくとつと追掛ける中
よりも松平又七郎家信生年十七歳真先よ進と大音
よ母衣の出しよ見覺えあり野呂助左衛門すそい
無やさくもあくも後と見とるとよと聲りくとい助
左衛門馬と射さとて歩立あり又七郎と見返りお
しき若のうか我子の助三ろう承あるべしとお
のひつゝ切合い又七郎り郎等松平但馬守こしり
來り能しるへや敵い請太力なるとと聲とりけつ
い見物を助左衛門い大太力あり又七郎い小太力
あるとも早りけとい助左衛門跡まつさりよ引け

ると又七郎押しをとて無手と組しり助左衛門い大
力あり又七郎と組敷首とのうんとなりける處と
但馬守落合處へ又七郎り近習よ關口左乞けり寄
て右手の脇とさうんとるとと助左衛門掻つく
て三間くりり投出しける其跡へ小嶋瀬平逸見彦
六以下七八人落重るりて終よ助左衛門とり倒
とい又七郎と引返し終よ首とりさ落と
甫庵本よ羽黒の東山際りて野呂助左衛門と
つてうへし討死とたり長子助三い夢りも知
と五六町も退し處よ助左衛門り馬取のの見
えたり助三呼寄て父の行衛と問よ敵六七騎追

うけ来う母衣の出しを見知たるゞ野呂助左衛門よ
とゝ無ゝさとなゝも後とゝせぬのゝ引返し勝負
ゝへと云ゝ處ゝて此小刀うさゝゝ子とのゝさゝとぞゝ
仰らるゝて討死ゝゝゝとあり
助左衛門尉う長子助三ハそゝるゝよ退たりけゝる
助左衛門尉討死のゝゝと聞て馬と引うゝゝゝゝと
敵よ向ひ是へ野呂助左衛門う嫡子ありといよ處
へ助左衛門う口取男ゝゝゝう来りゝゝうハ鬢の髪と
切汗中よ取そへ故郷の母と妻との許へ持参をゝへ
ゝといひ捨敵の中へ駈入て手負獅子の如く切て
廻りゝゝうへ遠三の兵士大よ切立らゝと色めきける

よ勢と増いさゝ進んて戰へハ遠三の兵士たちまち七八騎
切ゝとさるゝされとも續ゝく味方ハあゝ大勢よ取あめらゝと
大童よなりて戰ふ處へ松平主殿助家忠ゝを来りそれ
あゝハ野呂助左衛門尉う嫡子助三と見るハ辟目ちと
も退あゝと聲うひて鎗と合をけゝるよ助三ハ太刀と以て
切拂ひゝゝたけり立て戰ひけゝると主殿助浮つ沈つ突
うゝゝ終ゝよ眉間とたゝと突痛手るとハとゝゝも
たまゝゝひ馬ゝう眞逆よ落けゝると主殿助とゝゝう馬う
飛下てらゝゝ首とうさおとゝそのゝゝ鳥付の緒よ付
たりけり遠三の侍ともゝゝゝ勝わゝう北勢よ大山へ
わゝゝゝそ只一時攻よ攻おとゝ池田父子と打取ゝと

いさましけるを大須賀五郎左衛門尉酒井左衛門尉くさく制して追しめ是をも勝さる軍のりさんとも味方今朝より駈とりて士卒も大将もつかれたるの上に犬山まで押ゆうんのいまさら疲るくうつい勝軍に敵とあかとらるべけるへ味方の兵氣驕りて必勝の機といふべし犬山に籠る處の池田勝入齋老功の古兵ふり城をたのむとも軍の氣とおとろり知らんさは今日の敗軍とのり返さんと云へしてあるべき處へおしよせて勝ん道理はあるべからず面々のいとらるる處もとそうしいつまでも今日の始末と言上し御下知を伺ふべしとて討取處の首数三百余級と實撿に入味方の討死い七十余人と注進したりけり　重修眞書太閤記九編卷之二十終

重修眞書太閤記九編卷之二拾一

池田勝入齋稲葉入道犬山に備る事

并三遠諸侍池田勢を欺く事

爰に森武藏守長一遠藤但馬守胤基自身の勇氣をたのみ他の勢と交へず羽黒表八幡林に出張して遠三の諸軍勢と一ひしさに挫付んと敵と侮とりしりぞけて奥平九八郎信昌大須賀五郎左衛門尉康高酒井左衛門尉突崩され野呂助左衛門父子をはじめ仁科權太左衛門岡村彌太夫礒上等名ある者多く討死味方大に敗軍しけるをいかん方なく犬

山さして引退く然る犬山すてい池田勝入齋森遠藤ら手勢くりうして羽黒の八幡林すて出張したる由と聞眉をひそめ大息繼て申けるハ森武藏守ハ年若くして武勇ハ相應なれとも思慮短く遠藤ハ老功なるゆへ共ゆ打出つるとの愚りさよこそ〳〵今ハ遠三の勢ゆ追立らゆ見苦く敗軍をへてこれと余所ゆ見んと口惜さ次第なりとて稲葉右京亮貞通と乎近付いさや八幡林ゆ打出味方の敗軍と援けて遠三の侍ともを打散さんと勇ゆとけるゆと池田の家の長臣片桐半左衛門荒尾四郎右衛門進ゆ出て武藏守殿但馬守殿羽黒おりてへ

出張あらゆ前日放火の事と両人ゆうそ〳〵めて仰らゆとすゆその日ゆなりて打出るはさりゆことを残念ゆ思ひるゆ態と當方へ無沙汰ゆるされゆなう然ゆると當方ゆう御加勢ゆつ定めて両人とも本意ゆ〳〵おゆ〳〵めさるへゆ今少ゆ御見合その機變ゆうして御出陣あるへゆゆと諫めけるゆうゆ勝入齋も尤の次第なりゆ然者犬山の段へ打出ゆ斥候と以てその擧動と窺ふへゆと申けるゆうゆ稲葉右京亮貞通今年四十歳眞先ゆ打出けるゆと父の一鉄急度見て其方未練なりゆ我等年つのりて六十九歳軍ゆあゆと十六歳の初陣ゆう大小七十餘度森

遠藤の両人今よ追立らまおの所へまけ来るへ
と云言葉のいまと終らぬうちよ森遠藤の手の者
追々よ逃来り遠三の勢おのひの外強くして味方
散々よ打ひけり早く御加勢ゆへ〳〵と注進しけ
る處へ森武蔵守遠藤但馬守鞭よ鐙と合をて馳來
る池田勝入齋両人よ向ひいりよ武蔵守日頃の勇
氣よ似も付ぬ見しめる有様や但馬守ハ老兵か
うまりるよ思慮ふさ軍の次第りふいて入道一あ
て當て壻の武蔵ら恥辱と雪むへ〳〵の共繼けと
馬よ打のり打出んとふしけまハ片桐荒尾以下馬
の前よりけふりあいハ物よ狂ひるへよ敵ハ勝軍

して勢たけく然も酒井左衛門大須賀五郎左衛門
あと名譽の侍多くその上よ物見を出して能々あ
ると探らをしよ前田備後両脇備とあ〳〵ふの
樹蔭藪のわとうよふをしと聞左様の處へりけ向
ひりあく味方と亡さんと近頃以て御短慮よい
と申をしりへ勝入齋のや〳〵敵よ備あまハ味方よ
も亦備あり伏兵こそ〳〵軍りふるへさやと云て
既よ馳出んとあしける處へ伊木清兵衛しり來
と北畠殿の御勢とおや〳〵二三万餘よて大垣表
へあし寄ハ由只今斥候のめり注進ハと申けま
ハ勝入齋さもあるへ〳〵然ハ此勢よつ大山よ入て

手配と定め大垣へ向ふべしと云ひ時遠藤但馬守勝入齋に向ひ申けるは遠三の兵士多しと云へとも酒井左衛門尉智慮深き大将と聞しに合をくに今日ふらめく拭向ひいひしはその軍立のたひしくい事たとへは飛鳥の林を出没するに似て進退自在なりまた水鳥の浪上に浮沈する如く變化相と極めなきに亂基是迫度々の軍に逢いへとも今日の戰ひはと烈しく聞るさと終に覺不申い何様海道第一とひの頃世に申沙汰しい濱松の軍法織田殿と五人三人合をとも及ふましく存い敗軍の条ないへい御用ひあるましくいへとも能々御思慮あるへくい只今御打出ひて御合戰ひてとも直さび賤岳の佐久間玄蕃と同し列あるへくいまつ〳〵大山へ御引返し地理と御考あるて待をあくくい拭るへき軍に非とと但馬守詞と盡して諫めしらい勝入齋も左いふのの古兵にして然も遠三の武邊と長篠姉川すて見たりしとあるい最とおのひ大山の段の上に陣ととりて遠三の兵士おそしと待うけさう

甫庵本に大山にて勝入父子稲葉伊豫守子息右京亮郡上の両遠藤都合其勢三万余騎大山の段の下に陣と備へ有けるに武藏守敗北のしを

聞是より拭つて合戰を挑み勝負を決をんと勝入身をのんで勇こうとも誰やらん勝入の陣より拭ふさうあの競ひ來る旗先よりうあい利ふうるへ〳〵此勢と上の段へ引あけ御待いへと申けうと有

池田う勢い三万余騎三手よ分て備を立る稲葉入道一鉄齋い老人のくらも強氣の人なをい若き人人よ向ひ今日の一番合戰いひの古入道り請取たるとや老後の腕ためし軍よ花を開しと呉んといふうう早く鎗おつとうう〳〵と打ふり力もいまた相應あり老の波血の川よたゝえて面々の興を

もよふさうやと云てめう〳〵と笑ひ少し下さ處よ馬を引立さと今や〳〵と待とふる氣色そうあたのの〳〵さ此時濱松よい羽黒表へ御到着ありけるよう松平主殿助奥平九八郎等い犬山へ押寄有無のいくさとあさやとて既よ人数を押出さんとなすけける處へ濱松の物見くり帰う言上しけるへ池田勝入齋い短氣ののあるうめい段の下よ和へ今い上の段よ備を立てい是い當方の寄るを待て勝負を決をんと計すと見えひそのの傍よ稲葉一鉄父子も見えていと主進しけをい間食をさも有へ〳〵さとう池田勝入ふう一鉄ふう塲

うとと経たる侍あり然へそのへ寄てハ詮あるへ
し先陣のの共うう〳〵あ〳〵て敵を試さひへと使
番天野作左衛門と以て奥平九八郎松平主殿助二
人え御下知ありけるに両人直よりあ〳〵出て犬山近
くあり〳〵頃鉄炮とあ〳〵りけ関の聲と上げるよ
ろう池田勢とたゝ遠三の侍よと来り〳〵ぞと色め
きけるとと見て一鉄甲けるい遠三の勢とも陣そう
ひるとおわえさう決して軍へあるよ〳〵さあうと
勝入齋よさ〳〵やひの勝入も實よさもあるへ〳〵軍
へ今宵う明日の早且ふんとうよ内り遠三の諸
勢旗の手と動い〳〵元の道と引てゆけハ池田も犬

山へ退く其間よ濱松の御勢小牧山へ入て陣門
と嚴重よ備へけう池田方の壯士とも參遠の勢の
跡とーたゝんと馬と出けると見て一鉄とよ
うう〳〵制し追しめ若き人々へ加様の處よ
て過あるゝぞや老法師う年來りる處よ過した
り〳〵とと〳〵う聞とん面々の後學よと〳〵參遠
の侍ともあ〳〵勝軍へ〳〵たり進て寄來るへきよ寄
る様とーて寄來らば是へとの〳〵の如くとゆりよ
とやうと拵らん時伏と以ておれと引たゝ討へ
き謀あり静ろう〳〵へけて音あとそやゝ〳〵知へき
あうとうとれとけうと矛とうゝて扣居たうさ

て時とうつをとも伏兵も見えば若人ども口々よ
老人の長詮議よとうつと追つと敵を追ひけば
あつつと手柄とあつとるとの口惜さと私語ける
うちよ日へ西山よ傾さつ池田稲葉も引入んとを
し頃丹羽勘助榊原小平太以下三四千人ばかりし
おろう起りたち小牧山へ引入けると見とるて
て一鉄のいのつる如く伏勢ありけりとしめを
しるし壮士たら舌をふるうて感しけりいうも
をやうとうびむりひあいあの伏勢よあつて軍難
義あるへきよ一鉄の老功よりう敗軍の上よりさ
危ふうるつる軍を慎しとるといつとも何も場数

の功とはあよにう爰よ池田勝入斎ハ遠三の勢と
打破るつ種々よとうつつこの相違をしと無念
よおのひ肺肝を苦め秀吉郷の出陣を今やつとさ
なるとけり

羽柴宰相秀吉郷大坂首途の事

酒井左衛門尉忠次秀吉郷の軍配を知事

濱松の御勢事故あつ小牧山へ引取伏勢とるつし
丹羽榊原おりつと御本陣へ入けるよ然ハ勝関の
式を行とるへつとを首帳と調へ次第よりて實
検を歴けるよ野呂助左衛門首松平又七郎打捕之
と云時又七郎助左衛門ハ近國よ聞えとる大力の

勇士あり其方實より打取しなやと御尋の時又七郎謹て申上けるハ私組伏らるゝ既より討るへきり一處へ家臣等落うさるう助けいよりう討取申いと有のもるゝ言上しけるとい御感狀と被下りの家臣等へも同しく御感狀と被下けう次より奥平九八郎とめさるゝ上方より鬼といくるゝ森と討崩しけこと莫大の忠功ありとて福岡一文字の御刀と被下その功の次第より依て恩賞と行くれて柳小牧山の御陣營い榊原小平太康政の言上をし處あるゝと酒井左衛門尉より能見をゝしとしのち柵と結堀とゝらゝをしことなり其外春日井郡小幡より本多豊後守廣孝穂坂常陸介と置ゝ岩崎の砦より丹羽勘介氏次と籠らゝ廿四日ゝう御本陣の經營ゝりゝう廿八日ゝハ悉く出來し北畠殿と共ゝ爰と御本陣と定めひ清洲の本丸ゝい内藤三左衛門信成二三の丸ゝい三宅總右衛門康貞大澤兵部大輔基宿安藤彦四郎等と置ゝひその外蟹清水外山邊ゝも要害とりゝへて遠三の通路と自由をゝむ此事犬山へも聞えしゝい早馬と以て大坂へ注進しけゝハ天正十二年三月廿一日羽柴宰相秀吉郷十二万余騎と率して大坂と進發ありしゝい先陣ハそや犬山のとゝたなる大豆戸の渡と打越犬山五郎丸邊ゝ陣とい

ら孫村々里々軍勢あり処もあり廿四日大垣城
より著あひ〻て軍勢の手配をかゝ一番左
備ハ日根野備中守弘成舎弟彌次右衛門弘隆父子
五人より長谷川藤五郎秀一と添らとり其勢二千
六百余騎右備ハ筒井法印う家督四郎定次家臣飯
田三郎次郎箸尾宮内其勢五千三百余人中の手ハ
三好孫四郎秀次一柳市丞直盛堀尾茂助吉晴一万
余騎あり二番の左ハ長岡越中守忠興六千余人右
ハ堀久太郎秀政小川土佐守三千七百余人中備ハ
蒲生忠三郎氏郷木下半右衛門二千八百余人三番
の左ハ氏家内膳正德永石見守入道二千人右ハ中

川藤兵衛秀重同平右衛門千九百余人中備ハ蜂須
賀小六家政宮部善祥坊三千五百余人生駒市左衛
門一政世良田左馬助牧村長兵衛三千五百余人右
ハ黒田官兵衛孝高三千余人中備ハ伊藤掃部助前
野勝右衛門山内猪右衛門千五百余人五番の左ハ
木村小隼人三千五百余人右ハ高山右近大夫金森
五郎八入道明石與四郎七千餘騎中備ハ丹羽五郎
左衛門尉八千餘人六番の左ハ加藤虎之助清正同
孫六喜明尼子六郎左衛門三千七百余人右ハ福嶋
市松正則脇坂甚内安治平野權平長泰四千二百余
人中備ハ野々村肥前守山名右衛門大夫豊國粕屋

助右衛門武則七千余人あるい本陣より近き故其人と撰くわしてなり七番い本陣秀吉郷あり御供の人人い毛利河内守秀頼伊木半七櫻井左吉伊東主計赤松彌三郎竹中半兵衛重俊平野九右衛門其外近習馬廻りの面々前後左右より備たり片桐助作い近習小性の支配役として大将の側をとるかさぶ本陣より組入此時石田左吉三成も片桐と同しく御座の側より伺公とり此手の總軍三万余人後陣い蜂屋出羽守頼隆淺野彌兵衛長政冨田平左衛門津田小三郎拓植與左衛門古田内匠頭戸田彦三郎宮城藤右衛門以下一万八千余人兵粮以下雑事をして是と

奉行と都合十二万八千余人とあり

一書に本陣三万餘人と云譯と記して云くあり

大将の馬廻り廿四人あり此廿四人いつれも侍十人小者三十人と召連たり合をて九百八十餘人近習組五十人宛五組二百五十人此衆各侍十二人ゐ小者三十六人と召連合をて一万二千二百五十人使番組三十人宛十組三百人此衆侍十五人小者四十人合をて一万六千八百人あるを本陣の三万余人と定む馬廻り廿四人い六人つ川組て大将の馬の左右に三人宛當番し非番十八人い前と後に列とあるい近習五組つゝ當番し

廿五人宛左右に列と非番四組は前後に列を使
番十組は二組づゝ當番にとゝのへ
廿七日犬山に著陣あり直に諸軍を從へ樂田羽
黒の邊にて巡見しあり青塚に本陣を居らるゝ淺野
彌兵衛尉冨田平左衛門尉戸田彦三郎を召し敵陣
の様を試こゝへと仰付らるゝその〳〵も總軍旗の手
と動かし給ひしかゝ遠三の陣々色めき立て見え
けるを秀吉金の唐冠の兜に前立後立脇立中立に
て緋威の鎧に緑の羽織著道標うつかとはけ白月
毛の馬に紫綾の手綱うけてゆ〳〵と歩行をつゝ
人もあり見とゝへ遠三の諸侍これを見

て大将あるへしあやまりに落付うつ我々を這出わ
とゝもおのゝくぬ氣色のゝさに一當あて〳〵肝を
ひしゝとやと陣々に騒き立鉄炮を打うけ
んとひしめきけるを秀吉卿は悠々と見渡しあひ
猶も進んで近々と馬を立あふるゝ然は上方勢
戰と持と見えたるを敵のゆ〳〵ぬ先に此方より
押寄んとてゆり雄の侍ゆつまゝ〳〵馬を進めて
軍奉行の至るとまつ上方勢は十二万餘味方は
つゝに四方に足ぬ小勢なり對揚をへ〳〵見えさ
うけり秀吉馬を立直し小牧山に向ひて鞭を以て
物とゝへる体とあ〳〵まさうゝと笑ひあふを

三州勢さうと見て惡しく秀吉何事と笑ふて其まゝ
ゑ帰をくべきよあらんと若殿原こゝを駈出んとあしけるを
酒井左衛門尉忠次大須五郎左衛門尉康高馳まをうて諸
軍を制し日もくれや申の刻を今日は軍はあるまじきなり
面々くあく清洲へまいり兵粮馬草を用意しなへと下知し
両人は御前へ参上し上方勢は鶴翼の陣をとりそひへとも今
日は軍を持申まじたく例の秀吉の大器を示しうつ陣を取
固めんう為と存ひたく此御陣中へ忍ひの入てやひてん
そくん例の立をくり居をくり御下知ひへしと申沙汰
しその〳〵大須賀五郎左衛門味方を馳廻り今日は軍はあ
るまじきと何も面々の陣中とゝ〳〵取鎮め申さるへし

上方の忍ひ多く入てひへしと觸しうは陣々へ子細へ入と改めけると
諸物頭へうふまいあまいあるとわと近々と寄ひ敵のうくらぬとは何と
以て申されひやと未審とれ忠次康高同へ申ける様されはひ大
垣へうへ今日來へ勢共也大河とも越て十里へ及ふ道あへ
秀吉へうへ猛くとも士卒は何とも凡人なへ脚も金へはあへ日は
とそへへ夕陽あへ夜合戰の危ふきことなとも知たる上あるのと但あ
の大軍とさへと推出したるは土堤へ築へ為とおわえひへ又敵へ
へ仕掛ひくへそまへと誠へ天の與ふる處へひへとも決へとへ不
申ひと申切て酒井大須賀は本陣へ引入へそのうち小牧山
の御陣中へ改めへまへ處陣々へ三人四人へ何とも知ぬ夫人らし
きものの走出て雲と霞へ迷失たへ是へ引捕へんと近寄却て手と

頁ゝのものもあり、けさは弥酒井大須賀の心付ゝと感じけりそのうち
ゝ夜あけゝさは朝霞の間ゝより見さくるに昨日のごとくに秀吉の軍
勢の立るあとゝ主張りて堤と高く築上柵と結堀とあり嚴重ゝ陣城と
甫庵本ゝ三月廿一日大坂を立ゝ宇治瀬田邊ゝ拔ゝ勢の次第ゝ打
ゝゝ廿三日四日ゝは先勢大山の下大豆戸の渡と越大山五郎九邊ゝ著
廿七日午刻ゝ秀吉卿大山城ゝ入ゝ未刻ゝ樂田羽黒邊ゝよりて諸
大名衆召つれらるゝ一行で出小牧山ゝ對ゝ向城とあり〳〵栫へ〳〵とゝ評
定あり二重堀の要害ゝの先手ゝとて日根野備中守舍人彌次右衛
門尉子供五人其勢二千余入置る岩崎の山ゝ稻葉父子四千余小松
寺城ゝ丹羽五郎左衛門尉八千余青塚ゝ森武藏守三千余内ゝ淺山
蜂屋出羽金森五郎八三千余とあり

重修眞書太閤記九編卷之廿一終

慶應七五

国立公文書館
National Archives of Japan